



水巴蕉庵小文庫 下

中村俊定文庫  
文庫 18  
130  
2







小文庫

復之部

文字摺石

此乃の郡ト小の里ヤヤ文字  
とらとれ名所ト方二間トら  
石乃り此石をじト其れが  
らより村ト其御ト文字  
ト山ト藍摺ト



文庫

六九



いそぐさけくさくさくさくさくさくさく  
埋積して石の田の下を流るる乳  
しるせぬ風持て今に流るる  
さるさるさるさるさるさるさる  
りさる

早苗とぬのりや青虫なり

芭蕉

前書さるさるさる

一川晚てさるさるさるさるさるさる

つらつらと舟かへさる佛生會山店  
權佛や釋迦や提婆六法才に之道

落柿舎閑居 嵯峨日記さるさる

けいふん大竹藪とさるさるさる  
郭公鳴や湖水れさるさる  
夕陽さるさるさるさる時鳥山店  
かたさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる

さるさる

大庫







乙州餞別

花麥れれ其の力火もくも 山店

浴柿舎用居 嵯峨日記おとくろり

抽乃花じーとあふ掛理れるく茂

あふく

五月雨や蚕の月より素のくはは

之病や物くくく五月雨史邦

くくくくく物くくくくく 山店

川乃くく抗大立やはくくくく 史邦

箱崎や岩くくくくくく 養浩

只れれ麦れくくくく 山店

間不容髪くくくく 山店

くくくく起合くくくく 山店

くくくく

く

くくくくや尾越れ鹿の糸くく 嵐竹



田一く

草しりや蠅及蜘蛛身はくはひ史邦

蒲のむよむこくまの濁る水 水筋

一田はくぢりくくくくや水志音 北枝

虫れ食夏菜とけりや寺畠 荊口

卯月れくくくくくく

旅のけれくくくく

ツク夜くく風及けくく

ワノ宿を敷れらくくく

ふか月の竹の子けり作生嶋 去来

六月とく月くくくくや下 東以

正成之像

鐵肝石心世人之情

形くくくくくくくくくくく 摘れ家 心音

接子くくくくくくくくくく 山嵐

くくくくくくくくくくく 今



五六十海老にやうて號一川之道  
を修くくともや夕川鈴麻山 史邦  
中少く化や蓮れ葉小畑の池のくま 木白  
まきの花らうや八嶋ちん今くれ口 史邦  
澤浮とく如才の濁ははるく 嵐七嵐  
麻の葉のわくじまをききれり 史邦  
之日月れり山く居れ極麻 嵐竹  
麻外て風とらとをく小家川 軒嵐

幌赤ふれれく雀か子飼か 河瓢  
日れ勢やくれくくく百合花 素繪  
鬼百合やうんどのひくで幘のく 史邦  
水仙乃種と千目やまこれ多 嵐竹  
表れ幘とくくくく暑と多 乙初  
鴨の子の芦根く如おのりか 相笑  
甲斐希内ととく  
道げふまゆ千くくくか 許六

本集

詰



わさふれ二葉よくはわづれ 去來  
煉下段日蓋のり一臺所 怒風

旅行

瘦馬れ鞍つりわろ一葦第一把 史邦

窄人一と東武へ下段日霽田

ローとして

とくかきとるわたりり暇分暑く那 今

とくかきとるわたりり暇分暑く那 今

丈山之像謁二句

風はけり羽織を襟をけりくは 芭蕉

とくかきとるわたりり暇分暑く那 今

琴川で老をふむとよ夕とく人 智月

箒木よ日とくかきとるわたりり暇分暑く那 今

石竹小雀とくかきとるわたりり暇分暑く那 今

ゆき

わさふれ二葉よくはわづれ 去來







想我々をくくいら志日茂松極  
くさかふふまうくくれれれ乃  
くまらまのひらたてよ時鳥を  
くまらまのひらたてよ時鳥を  
の胸をくくくくくくくくくく  
幽美れわびびわ花のりさ山店  
いれらの荒てひくくくく史邦  
黒くのおくくくく青葉く山作

首塚

首塚やとげ小咲く花じりり 史邦  
首塚やとげ小咲く花じりり 史邦  
首塚や人もれりれ復山店

真間寺

真間寺や茄子れ味とじり繩 山作  
真間寺や茄子れ味とじり繩 山作  
真間寺や麦も櫻も寺の分 山店  
真間寺涼しき真間の馬揃 史邦



同所楓

日蓮を交へしとては若楓史邦  
その喰小茶筵うねやも楓 嵐竹  
大木やうねとくけり楓 山店

同継橋

徳橋の田うえや寺れ男も 嵐竹  
はま橋や田草しうねや海 水 山店  
つぎりの流人多田も水 鶏 船 史邦

帰路を吟

ほろろ水戸海道も夜船之 山店  
そのや情もとねん街 史邦  
舟梁をしまらふり流るる 嵐竹



餞別

新麥のついでに火もくはれ前途の  
山店  
まゝに相牧屋に定けりつ也  
馬時のついでに御いみぢの御不  
全  
に五千石をまのついでに山  
店  
方くへ醫者と引けり暮れ月  
全  
躍乃た法をれをせり  
蕉

盆このついでに寺に普請して  
全  
けり火者不氣とけり  
店  
蓬生よとてやめり男ゆり  
蕉  
濕の物とてれゆり南  
店  
丹波の使とてけり啼鳥  
蕉  
節一季の物とて利わぎとぬ  
店  
らゝし出して土器賣と追り  
蕉  
ろく原中よ月とてえり  
店



神鳴り新のりて水法水法と  
志やくつらるる人々で気がかたむけり  
奥の院をびく花と栴のとき  
きかへしむの心常かまひく  
二 美の目小産屋の伽のつりり  
うけりくや湯漬らあかん  
いせししくお股立とれをび  
目けしむの心数ありり  
雀 雀 雀 雀 雀 雀

しひらき櫛林よ日クサがれて  
佛の本比とけし系さく  
二海くく白撰出さるけり  
おららー草れあち竹掾  
羽二重し赤けりまきよ通かへ  
わひのり神きつとせ  
鶏とまきおんけりまきの月  
畠あくの積て山くどあかん  
雀 雀 雀 雀 雀 雀

紅筆



日光へん今下は穠乃ら  
うれくもあそ才か中  
中ふふ蒲生れ家も級切  
物一せしやかるる天目  
花のわらわは中山とゆつ  
藤々々々黒谷もんら  
雀

甲斐一

川野れ麦よりく心やうれし

小支車

穂之奇

秋やうらやうら此般の夜を

吊初秋七日雨星

元禄六文月七日の夜風を天  
今ら白浪銀河の岸と  
鳥鶴を橋杭と  
物あまけり二星も屋形と



一、  
過海、  
海、  
北、  
首と探く、  
先、

小町、

水、星、

過、

七、  
西風、

関、

色、  
五、  
少、  
哀、



去後たうぬ山に梅の下婦  
かみのかつ白ひよ志しく母の  
是の人目も園もまろ人びくさ  
りれらやも代もは出さじのよれ子  
春波の揺りし神志はまろくおれ  
うらも代もしし形ふも代も  
くれ老の身れ切まよじふも  
錢の中よ塊もまろくめ

情とりこも人さ終ふはけふ  
て罪ゆるしめぬく人生七十と掃  
ひりしりて身も盛りの事いけり  
ふ二十餘年也しし先れ老志  
も終るるり一夜の爰れし五十  
年六十一年のししひもゆり  
わさぬしりし生れて育寐ら  
又朝もり志く終終是れを別終



事しむじやうふ海りり者ハ  
しやうし煩惱増長して一藝  
とくはものハ是非れ揚ら物り  
是もよく昔のいれおふ當て貧  
欲の魔界し心と怒し溝  
血しやん生くと事わの  
あは南華老仙の唯利害を  
破布し老若とりまてく閑し

しじや老の樂しん去るをれ  
人未だたを困の辨をぬく他  
の家業とほくくはし  
殺る戸を閉て杜五郎の門と鎖  
そくは友りあ友中し貪  
留る火しして五十はく頑夫  
自書自禁戒し如也  
のころ也益を鎖は海多門の垣



撞し海をゆく木撞のれりり史邦  
竊道をれりりやうに玉糸 去來  
乳母の月をくもる泣き物 塊糸 山店  
糸しと船しと我れをばはらり 史邦  
れくく火や後らりり 袴さし 全  
盆とまゝて宵闇らりし 出れ聲もを  
牛鈴の一般の色なり 秋の風 全  
雀子まゝ長もつとじやわらぬを 忒之

不破しして

河の風や藪をくもるけのぬれの関しを  
しり嵐ぬきやを青し棠れい 全  
初草やまゝ日敷たれ秋の露 全  
あし露もいづれ花のらりり 全  
いささかしくははあやしや 女良糸 全  
弓とまゝに流るるや物し 史老  
玉のらりり海も床し 瓜根花 史邦



じいじいをらぬあまのあまの  
つひくを後世縁ひ也相撲取 史邦  
情鈴やりの味わう半れえ 探丸

更科 姨捨月之辨

わろひを去り、山と水はくまら  
あはれはくまら、姨捨の月心  
しとまをりおとれ八月十日の  
國より道へは月夜とくわ

けしは夜よゆく暮よ草枕はあ  
しとまをりおとれ八月十日の  
里しとまをり山を八幡やうと  
より一里より南よ西南よと  
より押して冷しと高くは  
とがしとまをり山を八幡やうと  
只衣あつと山を八幡やうと  
先よのしとまをり理しと



終く名を流よき物しよす  
中なる少く若くも人しよす  
才たがよきしよ波流世公礼し  
侍を焼いし物も月乃友し  
いしよいしよしよ郡水今

前書

復く名月名月名月名月名月  
名月名月名月名月名月名月  
今

世波

長崎より京へ海をゆく

鴨川や月見れ客のりあり 去來  
名月や夕日ふしよ官さか 塔山  
名月の西しよ波流世公礼し 知行  
名月や佃と磯だきよ山店  
名月や草れ園ふ小白夷花 花柳  
侍の身と流しよ月乃友 史邦



常陸へまゝりや耐船中へ

わをほのや廿七夜を三日月 以後

堅田十六夜之辨

望月れ弥真り成やん二子

いさく舟を堅田の浦へ

其日申乃時りりり

成香やうふ人志家れ

かこれ酔み狂容月ふり

来れり少聲くく

く年流中ら美らら

まに菖と掃小園中

りけり鯉鮒の切目

いも真りくも水岸上

のゆて真りとも

けりりりりり出湖上

てりりりりり仲の糧







毛此堂よあそび今くもや奴のい恵  
 公の僧都の衣もくははれぬ  
 といわくもく去真小宗にて  
 来終分容とりく身さくぬ  
 やかりの岸より盃と揚く  
 月日横川くくくく  
 鎖明て月りく入よ浮御堂  
 女くくくくくく月れき 今

鬼灯は實も葉もかき紅葉小 芭蕉  
 鶏頭くくく海合もく唐り 史邦  
 枯りの葉もくや雞及花 万年  
 花葛や松ぬれく大田成畑 史邦  
 くくくくくくもく山店  
 雨晴や煙のくくくくく 嵐竹  
 別りく明月日日和也 蓼の花 風竹  
 いりくもくもくくくく 薄糸 史邦



大見

猪妻やうゝの面をひくはる史邦

小見

猫娘のほしは胸のわくわく 今

鶴鴛やりのうさぎも白川原氷固

とんぼのや壁をわく畔のうさぎ 磨盤

鶯の目とつらや暮の啼鶯くさ

むくはる小夜と待の鶯が山店

く川鶯時計れ六もくさる 史邦

道くの鶯はらん葉より嵐竹

唐のふ袖はくはく鶯か 正秀

鬼とふらぐや夜明け麻の聲 風陸

森のふら麻の鳴子か 一歌

東山とつらや二まゝのふら

丈山乃庵の川板の音 史邦

尾崎の巻物とさね葉雞頭 今



前書

葉の香や庭下りしれり水戸れ庭しと  
らんらりのりや燈をれ後の葉今  
はくの葉あはく揺るれわくこく如全  
人くく古風わたりて黄葉川史邦  
胡寒やよよのゆき葉れれ風竹  
借りらり庵の心やきよの葉文章  
わら棚やまきふくく形お葉貯嵐竹

芽立ちり二葉よ志きり柿の  
葉や侍りくくはく月乃  
年くやまき身は彼落柿舎  
とくくはくはくはくはくはくはく

解く散を柿れ紅葉も麻呂の法 去來  
浪柿まきくくくくはくはくはくはく 文章  
木のなよ狸出しくくはくはくはく 買山  
やに葉りくくはくはくはくはくはく 史邦  
出の音や関宿船れ藤余れ竹 養浩



死もどね旅寐れしくよ秋の夜も  
權中も暮留主ははれと海つり 山店

嵐蘭追悼四夕

うねりや日少くまてらる柳 嵐作

菟麻れ實と志けり此後う那 山店  
くみりれい川も草は墓は落 史邦  
千貫れはる美理りる吾の病 去来

も光れふりやうくせむら  
かきもゆりやうくせむら  
九月に直れ衣もやうく

所の繩や月も寐れぬ散のら 史邦

一宿れ四角れ教と窓の月 史邦

柴の庵は後れはや一紙名はれ

此は東山は住る僧と初く  
西村のうまをうま 山家集  
のうまをうまをうま 山家集  
はるのうまをうま 山家集

柴のふの月やうまわらうま 史邦



伊豫國又まゝ宅よそがれ  
ゆりしつと妻の男の心よひ  
しつと物しつとちやうとんらん  
く旅の心とやとくしゆりぬ  
かみ日向の妻髪と切く席  
ととくしつとちやうとんらん  
さけりぬく

月とひと明智の妻をいづと

龍と経て蝶とけりや氣れ霜 全

梧うく龍の夜とやけこの霜 全

ゆく龍のひばあや青蜜柑 全

題鷹山別

正行りかみいと鷹山つと史邦

題司石

挾箱ふくくくやけくはし山店

題百氣

百氣とけりや茶間の南向嵐竹



三吟

惟子片月ふき波一鳴の聲

史邦

秋を糸と稻の山より伝ふ

夢の穂一將圓のうひと伝ふて

夜市よ人のさる夕月

木刀の音はくより居のひ抜

一階くくこれより東板

寒よりよ菜の下と物と立て

石丁りれしを縁寺れ鐘

手細エよ雜着扱たるんか

くひくをわくを思小月

肌さしを隣の胡糸乃と伝て

秋入とて心節守りて

塩濱よより伝はる音は

空住し始りてるのい



おろしれ新初めさひくさる水  
去ちくく家のくさたさるの 邦  
花い森じ一母の月を去る 雀  
小姓の口をなをさ三月 水  
竹橋の内よりさし氣定 邦  
馬の盡くく役もせし 雀  
夕々れ洗澤袋とがけ込く 水  
こゝおとわらさしきく乃吊 邦

梳りふふれおろしぬい海 雀  
淋あささぬ晴月くれむ 水  
夜のさひのゆきを床と坊子た 邦  
百里さのさし船のさおく 雀  
川割し去依杖木のささる 水  
うらとせはほを想中らさる 邦  
去さけく橋よ今形を月ふれ 雀  
りふとささるく鳴のさる 水



ウ  
指針より出て是月唐より  
障子より始り宿りえの船 蕉  
小南を降るの中より行り 水  
二夜三日に終るの月 邦  
考てより好く糸のよけり 水  
百姓やと心苗作の隙 蕉

座右之銘

人志短しと事少しれ  
己の長とよく事知れ  
物より唇寒し一穂の風

芭蕉翁

元禄九丙子歳三月日

系寺町二条上九町  
丹筒屋在る多岐坊

上巻

百七



